

## 実習報告（異校種実習）

## アンラーンに向けての異校種実習の省察 ー幼稚園と小学校の異同から得られる新しい授業実践・授業研究への示唆ー

原 里美（授業実践探究コース：現職教員）

### 【探究実習のテーマと設定の理由】

大学院2年間の研究テーマを「アンラーンで学力を育む教師の役割」と設定している。経験的に「当たり前のこと」として身につけてしまっている物事（習慣や概念、学級経営や生徒指導、授業方法、授業研究なども含む）を問い直し、今ある状況や新しい状況に合うように変化させていくことが「アンラーン」である。学校で「当たり前の事」としている「まなびの型」に潜んでいる、ほぐすべき「まなびの凝り」は何かを問いながら、授業改善や教師の力量向上の在り方を探ることを目的としている。まず1年次は異校種実習での教育実践を通して「幼稚園」「小学校」の異同を教師の役割という観点で比較し、2年次の学校変革試行実習への手がかりを模索しようと考え、異校種実習研究テーマを『子どもひとりひとりから始まる活動』を通して自主性・創造性が育まれる教育における教師の役割についての研究」と設定した。

### 【探究実習の研究目標】

○幼稚園と小学校の異同について分析し、小学校の制約や文化を捉え直す。

○「子どもひとりひとりから始まる活動」において、幼児とのかかわりを通して、教師の役割を探る。

（個や集団に応じた教師のかかわり、幼児の自主性や創造性が育まれる環境づくり）

○園内研修に参加し、幼稚園での研究や研修の在り方を探る。

### 【探究実習の概要】

実習先である佐賀大学教育学部附属幼稚園では、3歳児クラス（男児9名 女児10名 合計19名）で4週間の実習を行った。保育実践を、幼児と一緒に遊ぶ直接的なかかわりと保育計画や環境構成などによる間接的なかかわりで整理し、実習を通して見出した幼稚園と小学校の異同と授業実践への示唆を以下に述べる。

#### ①遊びの中での幼児と保育者との直接的なかかわり

実習の初めは、保育参加や保育補助で実際に幼児と一緒に遊びながら幼児の遊びの様子を観察した。また、担任・副担任が幼児にかかわる様子を観察し、自由活動の中で幼児の主体性を大切にする保育者の在り方について考察した。それぞれの幼児とのかかわりの詳細は実習ノートに記録し、保育マップ（図1）を作成することで、幼児の遊びの様相を俯瞰的につかむことを学んだ。

幼稚園では単位時間の区切りがなく、幼児は遊びたい場所で自分の選んだ遊びをたっぷり楽しみ、対象への主体的なかかわりや創造性を育む試行錯誤場面が生まれていた。そこでの保育者の支援は意図的で最小限なものである。小学校では教育課程で定めた計画のもと授業を進め、45分という授業時間内に子ども達を目標に到達させることが授業の原則的な考え方である。一人で多人数を評価するので学ぶ場所も限定されることが多い。「時間」「空間」「制度」の制約の観点から授業を見直すことで、

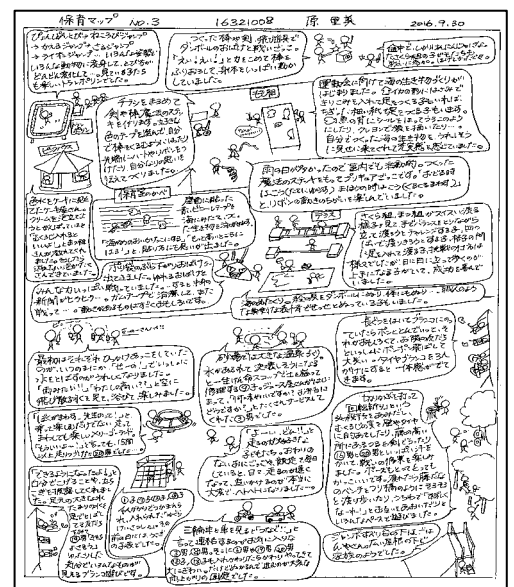


図1 保育マップ

子ども主体で創造性が高まる授業づくりを構想できるのではないだろうか。

## ②保育計画や環境構成などによる間接的なかわり

実習ノートの記録と保育マップをもとに、「自由活動」と「集団での活動（片付け以降の活動）」で保育案を作成して保育実践に取り組んだ。季節を感じる制作活動や子どもがやりたくなる魅力的な環境構成を構想すること、自由活動中幼児と遊んでいても視野を広くして多くの幼児の遊びの様子を把握すること、副担任と連携して安心して幼児が遊べるようにかかわったり環境を再構成したりすることなど、幼児が主体的に創造的に活動するための保育者としての支援について考えることができた。

小学校では教育課程、教科領域など教育内容がある程度定められているので、教師は活動を主導する「指導者」としての顔をもつことが多い。しかし、幼稚園では保育者は保育計画をもっている、幼児と一緒に遊び、遊びの流れの中で幼児の遊びが広がるようなかわりや環境をつくりだす、いわば「コーディネーター」「ファシリテーター」としての役割が強い。また、文字やことばを十分理解できない幼児が多いので、非言語の環境構成が重要な教育活動となり、環境から幼児の遊びの広がりも見られた。「授業での教師の存在（「教え-教えられる」関係からの脱却）」「人的環境・物的環境」の面からも、授業を見直せるのではないだろうか。

## ③子ども観と授業観を醸成する園内研修の在り方

園内研修では、幼児の様子を共通理解するカンファレンス、園内研テーマに関連した絵本の紹介、論文に対する意見交換会、そして「エピソード記述研修会」が行われていた。「エピソード記述研修会」とは、鯨岡峻が提唱する研修の手法で、対象の幼児の「背景」と保育者が心を揺さぶられた「エピソード」とその「考察」を記述し、他の保育者同士と読み合い保育を振り返り、子ども観や教育観を醸成するものである。ある場面における幼児との（あるいは幼児同士の）やりとりの中で保育者の内面の情感や葛藤、幼児への思いなど、目に見えない実践にも踏み込む研修会であったと言える。

小学校現場での授業研究会では、指導案をもとに研究授業の中で見られた子どもの発言や行動、授業者の発問や板書、教室掲示物や教具の有効性など目に見える実践について方法論を中心に議論することが多い。授業の一場面を切り取り、子どもと教師のやり取りや子ども同士のやりとりについて、背景（学習の履歴やその場面の前後の様子、教室内での人間関係）をも加味しながら、授業で起こっている出来事に向き合う教師の内面の動きを語り合う授業研究が、子どもが生きる授業づくりには有効ではないだろうか。様々な経験と個性を持つ教師集団が自分はどう考えるのか経験や理想をぶつけ合い、授業力だけでなく子ども観や教育観も含めた教師の力量向上をめざす授業研究を構想したい。

## 【探究実習の成果と課題】

小学校と違う環境で就学前の子どもたちとかかわる中で生まれた自分の小学校教員としての戸惑いの中に「凝り」を感じ、学校変革試行実習への課題を見出した異校種実習となった。附属幼稚園の「子どもひとりひとりから始まる」教育の核となっていたのは、「子ども理解」「学習環境デザイン」である。幼児についての理解（興味・関心、人やモノへのかかわり、遊びへの動機など子どもの行動の背景となるもの）と、幼児がかかわる環境や活動、遊びなどのかかわりの対象への理解の上に幼稚園の教育活動が成り立っている。子どもは身体と環境とのかかわりで学ぶという見方をすれば、小学校での授業づくりに向かう「子ども理解」も単なる学習状況の把握だけでは不十分ではないだろうか。

学校変革試行実習でも「子ども理解」を核とした研究に取り組み、教師の固定化しがちな子ども観や授業観をゆさぶる実践を行いたい。学級のそれぞれの子どもと子ども同士のかかわりの実態から構想する複線型の授業プランや、個を生かし個が生きる授業実現のための指導案の開発、方法論だけではなく教師の授業力を向上させる授業研究会の在り方の探究を柱として、研究を進めていきたい。